

# 逆流のマーカ―“才”

中 桐 典 子

## 0. はじめに

本稿は現代中国語の副詞“才”のうち関連作用を持つものを対象とし、その機能を認知的観点から考察するものである。関連作用とは偏正複文において主文と複文を繋ぐ働きを指し、“才”のほかにも“就”、“都”、“还”、“也”などの副詞がこれを担っている。本稿では“才”と対照的なふるまいをする“就”との比較を通し、“才”の本質に迫ってみたい。

条件複文と呼ばれるものには、次の2タイプがある。

(1) 只有努力学习才学好汉语。(一生懸命勉強しなければ中国語をマスターできない)

(2) 只要努力学习就学好汉语。(一生懸命勉強すれば中国語をマスターできる)

(1) は一般に唯一条件、(2) は必要条件<sup>1)</sup>を表わすとされ、これらの文から連詞“只有”、“只要”を除き緊縮文にしても(1)、(2)と同様の条件を表わすことができる。条件の違いを“才”と“就”が担っているからと考えてよいだろう。本稿では“才”、“就”の認知プロセスを考察することによりこの条件の違いを説明してみたい。

偏正複文は定型呼応複文ともいわれ、連詞と副詞の呼応関係が一定している。ここでは条件複文と同様に“才”、“就”の双方と呼応するタイプ―因果複文と目的複文―を考察の緒として論を進める。

## 1. 認知

考察に入る前に「認知」の概念を明確にしておく。山梨 1995, 5-11 によれば、外部世界の解釈には「状況レベル」と「認知レベル」の2つのレベルが関わっているという。「状況レベル」とは外部世界を真理条件的に反映するレベルで、「認知レベル」とは与えられた状況を言語主体が解釈する際の視点を反映するレベルとされる。「状況レベル」からはパラフレーズの関係にある言語表現も「認知レベル」から見ると厳密には異なる。例えば、

(3) 小李坐在小张的右边儿。(李さんは張さんの右側に座っている)

(4) 小张坐在小李的左边儿。(張さんは李さんの左側に座っている)

この2文は“小李”と“小张”の位置関係という状況描写の点ではパラフレーズの関係にある。しかし、言語主体が状況を認知していく順序が逆になっているため、「認知レベル」から見るとパラフレーズの関係にあるとはいえない。

(3) ではまず「“小张”の位置」を認知し、それを前提として右隣にいる「“小李”の位置」を認知、(4) では逆に「“小李”の位置」→「“小张”の位置」の順に認知が行われている。本稿では「認知レベル」において言語主体が状況を認知していく順序に着目する。

## 2. 因果複文に見られる特徴的構造

次に、因果複文の認知プロセスを考察するのに先立ち、まず“因为～才…”、“因为～就…”の構造上の特徴を見ていく。認知とはもとより、文脈や状況に大きく依存するものであり、構造とは対極をなす概念である。しかし、認知プロセスを考える上で手がかりとなりうる特徴的な構造を持つ文も観察される。

### 2.1. “因为～才…”に見られる特徴的構造

ここでは、まず“因为～就…”には見られず“因为～才…”にのみ観察された特徴的な構造のうち、使用頻度の高かったものについて分析する。インターネットにより収集した97編の小説から“因为～才…”の使用例66例を抽出、そのうちAタイプ18例(27%)、Bタイプ8例(12%)、Cタイプ10例(15%)

%) が確認された。

A. 先行する副詞により「原因」が強調されたり、取り立てられたりしている例

(5) 正因为自己不懂才画出来叫人欣赏。(自分では分からないからこそ描いて人に見てもらおうとしたのだ)

(6) 就是因为我们不认真听取群众意见才出现了这些问题。(我々が群衆の意見をまじめに聞かなかつたばかりにこれらの問題が起きたのだ)

“正”は「まさに、まさしく」の意で、肯定の語気を強める機能がある。(5)では“正”に後続する“因为自己不懂”を強調している。また、“就是”には範囲を限定し他を排除する作用がある。(6)では“就是”により原因が“因为我们不认真听取群众意见”に限定され他の原因ではありえないことが示されている。2例ともこれらの副詞により「原因」事象に焦点が当たっていると考えられる。

B. “是～的”構文により、「原因」に重点が置かれている例

(7) 那样子仿佛是因为做了什么危害他的利益的事才犯法的。(その様子はまるで何か彼の利益を損なうことがあったから法を犯したのだといっているかのようだった)

“是～的”は既に完了している動作についてその動作に関する何らかの側面に焦点を当て叙述する構文である。(7)では“犯法”という完了済みの動作の「原因」“因为做了什么危害他的利益的事”に焦点を当てて述べている。

C. 「結果」が旧情報であることを示す指示語がある例

(8) 或许读者会认为我是因为生活太幸福、太圆满了才会写出这一类的情节。(読者は私自身が幸福で円満な生活をしているからこういうストーリーを書くのだと思っているかもしれない)

この文の前には「私の書く小説では登場人物の素朴な愛情や温かい家庭などを細かく描写している」という説明がある。“写出这一类的情节”というのはこれを指しており、明らかに旧情報である。指示語“这”が旧情報のマーカ―になっているといってもよい。それに対し“因为生活太幸福、太圆满了”はここで初めて明らかにされた情報、つまり新情報を形成している。

以上 A、B により、“因为～才…”は前句に焦点がある構造と共起しやすいことが、また C により前句に新情報が置かれる構造と共起しやすいことがわかった<sup>2)</sup>。

## 2.2. “因为～就…”に見られる特徴的構造

以上の傾向は“因为～就…”との比較でより明らかになる。ここでは、“因为～才…”には見られず“因为～就…”に特有と思われる構造について分析する。“因为～才…”と同様の方法で抽出した“因为～就…”の使用例44例のうち、Xタイプ9例(20%)、Yタイプ8例(18%)、Zタイプ6例(14%)が認められた。

### X. 「結果」の句末に発生・変化の語気助詞“了”がある例

(9) 丽江的纳西族因为不顺路就不去了。(麗江の纳西族は遠回りになるから行くのを止めにした)

(9)の“了”は変化を表す語気助詞である。「変化」とは認知レベルから見るとAと認知していた事象をBと認知し直すことであり、その場合Bは当然、新情報といえる。(9)でも「行くつもりでいた」から「行かないことにした」へと認知の修正が見られ「行かないことにした」は新情報と考えられる。また、発生“了”も無から有への変化と捉えれば同様のことがいえよう。

### Y. 「原因」が旧情報であることを示す指示語がある例

(10) 因为这个他就成了队长。(このような理由で彼は隊長になった)  
この文の前には彼が以前、連隊長を任されたことがあり兵を指揮した経験があると述べられている。「原因」の“这个”はこの事情をしめす旧情報のマーカーになっている。それに対し「結果」の“成了队长”は“因为这个”を前提としてここで初めて示された新情報である。

### Z. 「結果」が“把”構文からなるもの

(11) 因为家贫难养就把大的送给了别人。(家が貧しく育てられないので上の子を人にやった)

“把”構文はある特定の事物に対する積極的な処置を表す表現である。そして、動詞の後には必ず事物に加えられた処置内容や動作主体の積極性を具体的に示

さなくてはならないとされる。動詞の後に補足成分が付加される所以である。一般に、省略されている部分が背景になりやすいのに対し、言語化されている部分は焦点になりやすい(山梨 1995, 13-15)といわれる。(11)でも動詞“送”の後に“給”、“了”が付加され授与、完了が言語化されている。このタイプの文は動作の補足説明の具体性により焦点になりやすいと考えてよいだろう。

以上 X、Y により“因为～就…”は後句に新情報が置かれる構文と共起しやすく、Z により後句に焦点が置かれる構文と共起しやすいことがわかった。

### 2.3. 新情報と焦点

ところで、新情報とは認知的観点から見てどのような性質を持つのであろう。「焦点」は「前提」の対立概念として「新情報」、「有益で興味深く目立っている部分」と説明される。また、「焦点」を形成する条件の一つとして「新情報を構成する部分」を挙げることもある。例えば、上記の(8)では「原因」が新情報であると述べたがこれは「原因」が焦点を形成していることにほかならない。(8)は、後に接続詞“但”で次のような文を続けている。「自分は世の中の恋人たちが仲良く幸せであることを望み、また、そのような結末を書きたいのだ」と。つまり、(8)で焦点の置かれた「(そのようなストーリーを書くのは)自分が幸せだからだと読者は思っているだろうが」に続く文なのである。この場合、新情報が焦点となっているとってよいだろう。

### 2.4. 因果複文における焦点

以上により次のことがいえる。

∴一般に“因为～才…”は前句に焦点が置かれ、“因为～就…”は後句に焦点が置かれる。

## 3. “才”による認知プロセス

### 3.1. 認知と焦点

次に認知の順序と焦点の関係を確認しておく。前述のとおり「焦点」は「前提」の対立概念である。「前提」とはある事象が成り立つための条件であるの

で認知の順序において「焦点」に先行することは容易に理解できる。これを偏正複文に限定して考えれば、前句が前提、後句が焦点であれば認知の向きは前から後へ、逆に後句が前提、前句が焦点であれば、認知の向きは後から前へ、ということになる。

### 3.2. 逆流のマーカ―

以上により、“因为～才…”の認知プロセスは後から前へという流れを持ち、“因为～就…”の認知は前から後へという流れを持つ、といえよう。

定形呼応複文には“就”とのみ呼応し“才”とは呼応しないものがある。“既然～就…”で表される推断因果複文、“要是～就…”、“如果～就…”で表される假定複文である。“既然～就…”は前句が原因・理由を表し、後句はそれに基づき推断を表す。

(13) 既然你都回答上来了，我就把你收下。(おまえが全部答えたからにはおまえを弟子にしよう)

“要是～就…”、“如果～就…”は前句がある假定を述べ、後句がそのような状況のもとで出現するであろう結果を説明する。

(14) 要是找到了鸡，也就能找到鸡蛋的主人了。(もし鶏を探し出せば卵の主を探し出せることになる。)

(13)、(14)の“就”はともに“才”に置き換えられないが、これは認知の順序という観点から説明できよう。“既然～就…”は後句の推断が前句の原因・理由に基づき行われている。つまり、前句が前提となっているので前句を先に認知することが成立条件となるのである。故に、ここに「逆流のマーカ―」である“才”を用いることはできない。また、“要是～就…”も後句は前句で述べた假定を前提として、その結果を述べている。ここでも前句の認知が必ず先行し、後句から前句へという認知の流れは成立しない。これらは“才”による認知の向きが後句から前句へという方向性を持つことの一つの証明になる。

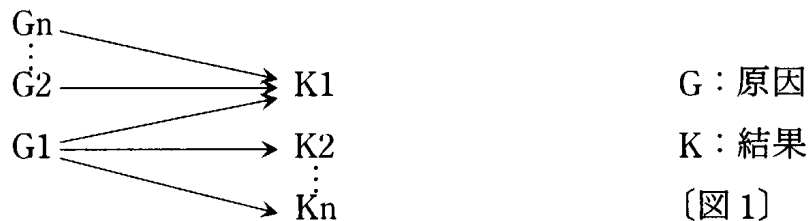
以上により、仮説を立てる。

[仮説Ⅰ] “才”による認知は後句から前句へ、“就”による認知は前句から後句へという方向性を持っている。

#### 4. “才”による焦点の特徴

##### 4.1. 因果関係

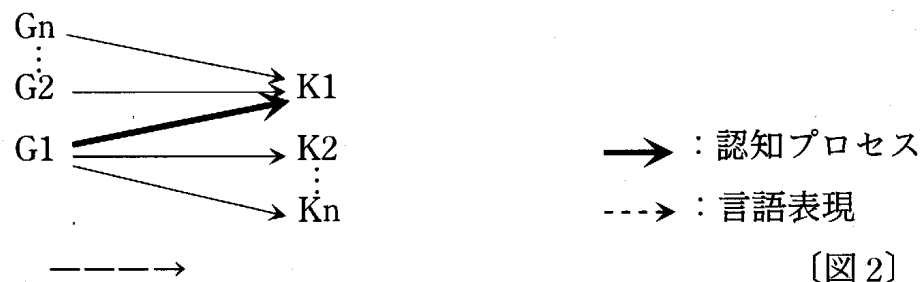
次に、「因果関係」ということについて考えてみる。状況レベルで因果関係をとらえると、「原因」と「結果」が複雑に絡み合った状況が浮かび上がる。1つの原因からいくつかの結果が生じ、また、ある結果を引き起こす原因も複数存在する。例えば、「からだの調子が悪い」(G1とする)ことが原因で「行かなかった」(K1)、「一日中寝ていた」(K2)、…「朝食を抜いた」(Kn)などのいくつかの結果が生じ、また、「行かなかった」(K1)という結果を惹き起こしたのは「からだの調子が悪い」(G1)ことのほかに「外が寒い」(G2)、…「お金がない」(Gn)などの複数の原因である〔図1〕。



##### 4.2. “因为～就…”

一般に、言語表現の順序は事象生起の順序を反映する傾向があり、因果関係はその典型例と考えられている。つまり、前述のような現実事象の一部を切り取って、事象生起の順序どおりに「原因」→「結果」の順に言語化するのが一般的な表現の仕方だということである。そして、“因为～就…”は前述の通り、認知の順序も「原因」→「結果」という向きを持ち、事象生起、認知プロセス、言語表現の3つの方向性が一致している。自然な表現の仕方といえよう〔図2〕。

(15) 因为身体不好就没去。(からだの調子が悪かったので行かなかった)

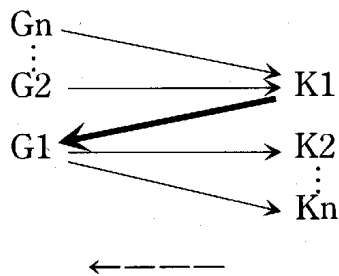


4.3. “～, 因为…”

それでは、次はどうか？

(16) 我没去, 因为身体不好。(私が行かなかったのはからだの調子が悪かったからだ)

状況レベルでは「からだの調子が悪い」という原因事象がまず存在し、その後「行かなかった」という結果事象が発生しているにも拘らず、言語表現の順序はこれと逆で「結果」→「原因」の順になっている。ここには話者の意図が強く感じられる。話者は言語表現の向きを逆にするにより、認知の順序が事象生起の順序と逆であることを暗示していると考えられる。つまり、「原因」事象を焦点として提示しようとする意図が働いているのである。(16)では“我没去”を認知の起点としてそこに用意されるいくつかの選択肢の中から、“因为身体不好”を選び取り、それに焦点を当てて述べている〔図3〕。語用論では一般的に新情報は文末に来やすいとされるが、認知の順序と言語表現の順序が一致しているのが一般的傾向であるということにほかならない。



〔図3〕

上記の(15)、(16)は共に認知の順序と言語表現の順序が一致しており、その点では一般的ということになる。

4.4. “因为～才…”

では、“因为～才…”はどうか？

(17) 因为身体不好才没去。(からだの調子が悪かったからこそ行かなかったのだ)

言語表現の順序は事象生起の順序と一致しており、「原因」→「結果」の順に言語化されている。そして、前述の通り認知の順序だけが逆向き、つまり「結果」→「原因」の順になっている。(16)では認知の方向が逆であることを言



## 逆流のマーカ―“才”

語表現の順序が示していたが、(17)では“才”がそれを担っていると考えられる。“才”が「逆流のマーカ―」になっているといってもよいだろう。そして、言語表現の向きとも逆の、不自然とも思われる認知の順序を採っているわけだが、そこには話者の何らかの意図が存在すると考えられよう。

### 4.5. 焦点化のメカニズム

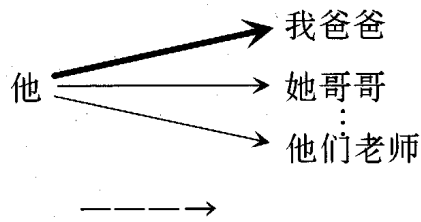
ここで、焦点化のメカニズムを考えてみる。(15)では認知の起点を“因为身体不好”(G1)にした時点でK1、K2、…Knの選択肢が用意される。その中の一つ、K1を選び取り言語化することで(15)の文が出来上がる。(16)では認知の起点をK1“没去”にした時点でG1、G2、…Gnの選択肢が現れその中の一つG1を選び取ることによって(16)が生まれる。では、(17)ではどうか？認知の起点を“没去”にした時点でG1“因为身体不好”はすでに言語化されており選択の余地はないと考えられないだろうか。もし、そうであるとすれば“才”によって焦点化されたG3は排他性を持つはずである。

### 4.6. “才是”と“就是”

この点について示唆に富む現象が見られる。繫辞“是”を修飾する“才”に見られる現象である。

(18) 他是我爸爸。(彼は私の父だ)

この文は因果関係などと違い“他”と“我爸爸”の間に状況レベルでの方向性、事象生起の順序関係はないが、これを“是”という繫辞でつなぐとそこには言語表現の順序関係が生じる。そして、話題としてまず“他”が提示され、想定できる幾つかの選択肢の中から“我爸爸”を選び取りその説明とする、という認知の順序も生じる。これを図示すると〔図4〕のようになる。この場合、「彼は誰か」に対して想定されるいくつかの選択肢のうちの一つに焦点を当ててはいるが、他の選択肢の否定を含意しているわけではない。例えば、彼は私の父であり、(私のお婆である)彼女から見れば兄であり、(教え子である)彼らから見れば先生であるとしよう。“他是我爸爸”はそのうちの一つ“我爸爸”に焦点を当てて述べてはいるが“她哥哥”“他们老师”には何ら言及していない。つまり、焦点のスコープが文中にとどまっているのである。



〔図4〕

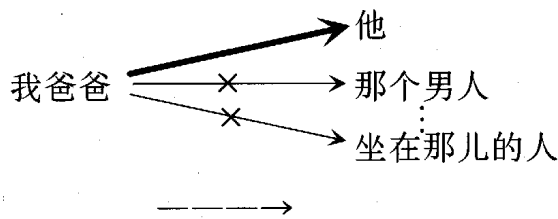
では、“他才是我爸爸”はどのようなメカニズムを持っているのであろうか。インフォーマントによれば次のB1とB2はほとんど同義だという。

A：这位是你爸爸吗？（こちらはお父さんですか？）

B1：不，〔遠くの男を指さし〕他才是我爸爸。（彼が私の父だ）

B2：不，〔遠くの男を指さし〕我爸爸就是他。（私の父は彼だ）

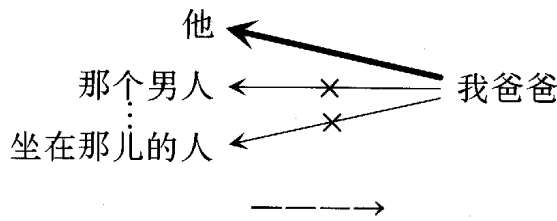
B2の“就是”は鶴殿1998, 72-81によれば焦点のスコープが対照命題にまで及ぶという。例えば、“成绩最好的就是小王”とは「成績が一番いいのはほかでもない王さんだ」ということを表している。この場合“就是”のスコープは“小王”にとどまらず王さん以外の人にも及び“别的不是”を含意しているという。「成績が一番いいのは（李さんでもなく張さんでもなく）王さん」なのである。同様に、B2の“我爸爸就是他”は「私の父はほかならぬ彼だ」ということでこれを図示すると下図のようになろう〔図5〕。“他”以外の選択肢は否定されることになるのである。



〔図5〕

では、B1の“他才是我爸爸”とB2の“我爸爸就是他”が同義と受け取られるのはなぜか？“才是”による焦点のスコープが対照命題にまで及ぶからと考えられよう。ただし認知の方向が“就是”とは逆なので図示すると〔図5〕とは左右対称の次のような図になる〔図6〕。

逆流のマーカ－“才”

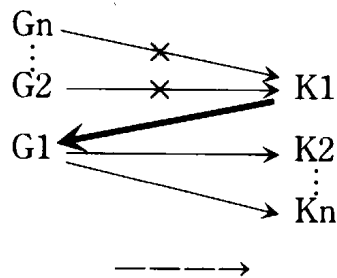


〔図6〕

この場合“我爸爸”を認知の起点とする選択肢には仮想事象が含まれることになる。「私の父はほかならぬ彼だ」ということを言うために「あなたが考えているように“那个男人”でもなく“坐在那儿的人”でもなく」と仮想事象を打ち消すことにより“他”を取り立て焦点を置いているのである。

4.7. “才”による焦点化

(17)でも同様の認知モデルが考えられる〔図7〕。“才”のスコープが文中の“身体不好”(G1)にとどまらず“外边很冷”(G2)、“没有钱”(Gn)あるいは仮想される他の事象にまで及び、それらを全て否定している。「私が行かなかったのは」「(外が寒かったからでも、お金がなかったからでも、その他のいかなる理由でもなく)からだの調子が悪かったから」なのである。



〔図7〕

以上により、仮説を立てる。

〔仮説Ⅱ〕“才”のスコープは対照命題にまで及び、その否定を含意している。これは“才”による認知の方向が言語表現の方向と逆であることに起因している。

5. 目的複文の認知プロセス

以上考察してきた2点が“为了～才…”、“为了～就…”にも当てはまるかどうか検証してみる。

状況レベルで「目的」と「手段」を捉えると「目的」が先行し、「手段」が

それに後続、そして一つの「目的」に多数の「手段」が想定できる関係が考えられる〔図8〕。



これを“为了～才…”を用いて表した場合、そこにどのような認知プロセスが存在するのか。“为了～才…”には“因为～才…”同様に以下のように特徴的な構造を持つ文がある。

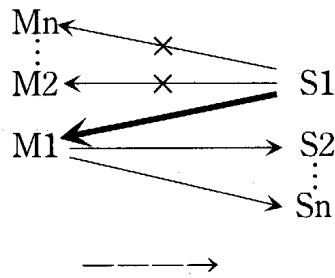
(19) 我是为了让你心理平衡才玩这么晚的。(私はあなたの気持ちを落ち着かせるためにこんなに遅くまで遊んでいるのだ)

(20) 正是为了广大人民大众能安居乐业…他们才自觉地舍生忘死。(まさに多くの人民大衆が安心して暮らせるように…彼らは自ら生死を顧みる事をしなかったのだ)

(19) では“是～的”構文により「目的」に重点が置かれ、(20) では“正是”で「目的」が強調されている。よって“因为～才…”と同様に「目的」が焦点、「手段」が前提と考えてよいだろう。つまり“为了～才…”は「手段」を認知の起点とし言語表現上の流れに逆流する形で「目的」に焦点を当てているのである。前述の通り、状況レベルでは「目的」と「手段」は1対多対応と考えられる。しかし、「手段」を認知の起点とした段階で現実とは異なるいくつかの仮想目的が選択肢として用意されることになる。これは“才是”と同様である。その上で現実に認められる「目的」にのみ焦点が当てられ、仮想目的はすべてその可能性を否定されるのである。例えば、(19) で言わんとしているのは「私が遅くまで遊んでいるのは○○という目的でも××という目的でもなく、あなたの気持ちを落ち着かせるというただそれだけの目的なのである」ということであり、(20) で表しているのは「彼らが生死を顧みないのは△△という目的でも□□という目的でもなく、人民が安心して暮らせるようにというまさにそれだけの目的なのである」ということである。

ここにおいて、仮説Ⅰ、Ⅱは共に有効であることが認められた〔図9〕。

逆流のマーカ―“才”



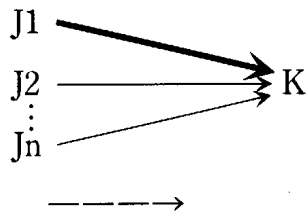
〔図 9〕

6. 条件複文の認知プロセス

次に条件複文の考察に入る。「条件」と「帰結」を状況レベルで捉えると複数の条件が一つの帰結へと収斂している図が浮かび上がる〔図 10〕。



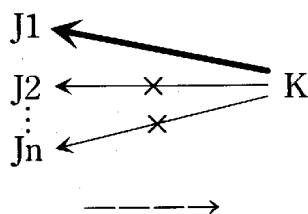
“就”に導かれる(2)では既に観察された“就”の認知のメカニズムによりこの現実の一部分を切り取り言語表現していることがわかる。ここでは J1 以外の他の条件 J2、…Jn にはスコープは及ばず、それらを排除する意味はない。つまり、(2)が表わしているのは「一生懸命勉強すれば中国語をマスターできる」ことだがこれは他の条件(例えば“上補習班”, “跟中国人交朋友”…など)を否定しているわけではない。これはまさしく論理学で“ $P \rightarrow Q$ ”で表されるところの条件 P なのである〔図 11〕。



〔図 11〕

次に(1)だが、前述のとおり、しばしば「一生懸命勉強しないと中国語をマスターできない」という訳がつけられる。これはどういうことだろう。「一生懸命勉強すること」を命題 P、「中国語をマスターできること」を命題 Q とすれば、これは“ $\sim P \rightarrow \sim Q$ ”という論理記号で表せる。そして、これは“ $Q \rightarrow$

P”の対偶であり、論理学では“ $\sim P \rightarrow \sim Q$ ”が真であれば“ $Q \rightarrow P$ ”も真である、とされる。この定義に従えば、(2)は「中国語をマスターするには一生懸命勉強しなければならない」とも訳せることになる。これは非常に示唆に富む。この訳は、認知が後から前へ向けてなされていることを暗示しているからである。「中国語をマスターするには」という後句の「帰結」事象が認知の起点になり、前句の「条件」事象、「一生懸命勉強しなければならない」に焦点を当てている。そしてこの訳では十分に表わされていないが焦点化の際には、やはり強い排他性が生じる。つまり、(1)は「一生懸命勉強してこそ中国語をマスターできる」ことで「中国語をマスターする」には「補習を受け」てもダメ、「中国人の友達を作っ」てもダメ、「一生懸命勉強する」こと以外のいかなる条件も役に立たないことを表わしている。「帰結」“学好汉语”を認知の起点として言語表現の流れと逆方向のプロセスを採り、いくつか考えられる「条件」のうちの一つ“努力学习”に焦点を当て他を排除しているのである。これは“才”による認知のメカニズムのなせる業といえる〔図12〕。



〔図12〕

以上、冒頭(1)、(2)の条件の違い<sup>4)</sup>も仮説I、IIにより説明できたといえよう。

## 7. おわりに

本稿では関連作用を持つ“才”について認知的観点から考察してみた。その結果、以下の2点が確認された。

I. “才”による認知は後句を認知の起点とし、前句を認知の到達点とした後から前へ向かうプロセスを持っている。その結果、前句が焦点を形成する。これは一般的な認知の順序とは逆の方向性を持つ。

II. “才”による焦点化はスコープが対照命題にまで及びその否定を含意している。これは“才”による認知が言語表現と逆の方向性を持つことに起因する。

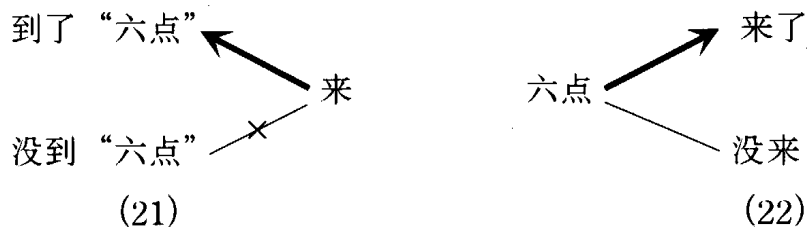
最後に今後の課題としたい点について述べておく。“才”には関連作用のほかにさまざまな用法があるが、特に注目したいのは数量詞を含む次のような用法である。

(21) 他六点才来。(彼は6時にやっと来た)

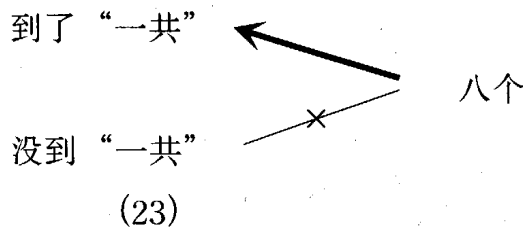
(22) 他六点就来了。(彼は6時にもう来た)

(23) 一共才八个。(全部でたったの8個)

(21)、(22)に関して、筆者は次のようなモデルを考えている。



(21)では“六点”に、(22)では“来了”に焦点が当たっていると仮定し、そこに選択肢を想定する。そして、その選択肢は当該時間あるいは当該レベルに到達しているか否か、という2項対立の選択肢であると考え。 (21)は「来た」のは「(6時になる前にすでにではなく)6時になってからやっと」、(22)は「6時には」 「(まだ来ていなかったのではなく)もう来ていた」となり、ここに当該時間を早いと感じるか遅いと捉えるかの違いが生じるのではないかと考える。また、(23)でも“一共”というレベルに達しているかどうかという選択肢を想定する。そして、「8個になる」のは「(全部を足さないうちにすでにではなく)全部足してやっと」つまり「わずか8個」が導き出されるのではないかと考えている。



ただし、(21)における“六点”、(22)における“来了”、(23)における“一共”を焦点といえるかどうかなど問題点が残る。

今後の課題としたい。

〈付記〉本稿をなすに当たり相原茂先生には貴重なご助言をいただいた。また、インフォーマントとして郭云輝さん、田禾さんにご協力いただいた。ここに記して謝意を表したい。

### 注

- 1) 「必要条件」という用語は『現代汉语八百词』による。「 $P \rightarrow Q$ が真であるとき、 $P$ を十分条件、 $Q$ を必要条件、という。」という論理学の定義に従えば、ここは「十分条件」となる。
- 2) 偏正複文はその担う役割により、前後2つの部分にきれいに分割される。ゆえに、焦点と前提をそれぞれ前句と後句に割りふることも可能である。次のような文ではそれは難しい。

他昨天跟小李一起去看电影。

下線部が焦点であるような場合、焦点と前提を文の前、後という分け方で割りふることはできない。

- 3) (16)は後句の頭に“是”を挿入することもできる。

我没去，是因为身体不好。

この場合は焦点のスコープが文外にまで及び“因为身体不好”が強く取り立てられることになる。ただし、これは“是”の問題であると考えられるので本文では触れなかった。

- 4) “必須～才…”、“要～才…”も広義の条件複文である。これらは“才”とのみ呼応するが、“必須”、“要”が「～ねばならない」の意であるところから前句が焦点化されるためと考えてよいだろう。これらは(1)と同様の認知プロセスを採る。



文献目録

- 白梅丽 1987. 〈现代汉语中“就”与“才”的语意分析〉,《中国语文》第5期, 390-398頁。
- 陈小荷 1994. 〈主观量问题初探〉,《世界汉语教学》第4期, 18-24頁。
- 刘月华 1988. 『現代中国語文法総覧』(相原茂監訳) くろしお出版
- 吕叔湘主編 1980. 《现代汉语八百词》北京:商务印书馆
- 鵜殿倫次 1998. 「取り立て」と「焦点」,『中国語学』245,72-82頁。
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』ひつじ書房
- 张谊生、吴继光 1994. 〈略论副词“才”的语法意义〉,《语法研究与语法应用》58-71頁。
- 张谊生 1996. 〈现代汉语副词“才”的句式与搭配〉,《汉语学习》第3期, 10-24頁。